

次回自然環境調査に関する申し送り事項（案）

令和6年度から7年度にかけて実施した自然環境調査における課題点等についてまとめる。

次回調査において、以下の点について留意して実施するよう申し送る。

（1） 自然環境調査計画書について

今回の調査において、自然環境調査計画書は環境審議会において報告され、自然環境調査検討委員会において議論が行われなかった。自然環境調査検討委員会の設置の目的は、「市が実施する自然環境調査の円滑な実施及びその調査結果を踏まえた本市の自然環境に関する事項の整理・検討等（船橋市自然環境調査検討委員会設置要綱より）」であることから、自然環境調査検討委員会において自然環境調査計画書の内容について議論すべきであったといえる。

このことから、次回調査においては、調査計画立案の段階から自然環境調査検討委員会において議論ができるよう努めること。

特に、調査地域及び指標種の選定については、以下のことに留意すること。

① 調査地域の選定について

調査地域の選定においては、選定の根拠や地域的偏りがないかについて、自然環境調査検討委員会において議論するよう努めること。

② 指標種の選定について

指標種の選定においては、以下の点に留意し、自然環境調査検討委員会において議論するよう努めること。

- 指標種の選定の根拠について明確にしておくこと。
- 市民が親しみやすい種、生きものモニタリングからの継続の兼ね合いもあるが、調査地域の環境状態をより評価できる種をさらに追加することが望ましい。
- 三番瀬については他調査地域と環境が異なるため、別の基準で指標種を選定することが望ましい。

（2） 専門調査について

環境の変化の評価やその調査地域、ひいては市域全域の生物多様性を検討するうえでは各分類群の個体数は重要な指標になるため、定量的な調査手法の導入について検討をするよう努めること。

(3) 市民調査について

今回、市民の自然環境保全意識の醸成、戦略に位置づける施策や今後の生きものモニタリング調査担い手の育成といった観点から市民調査を実施し、調査方法として AI による生き物の同定が可能であるスマートフォンアプリ Biome を導入した。

今回調査において、市域全域で 1,017 件(33 種)の指標種データを集積しており、これまでの紙報告に比べ、投稿数が飛躍的に増加した。

また、望遠レンズなどの鳥類を撮影するのに適した機材で撮影をしたとみられる種(サシバやミヤコドリ、ダイゼンなど)についても、データを集積できている。

このことから、市民調査において Biome を活用したことで、初心者から生きもの愛好家まで気軽に調査に参加してもらえたといえ、さらに精度の高い生き物のデータ収集に有効であったといえる。

今後も、市民調査において Biome のような ICT ツールを活用することが望ましい。

一方、市民調査で報告されたデータは「一般市民にとっても視認しやすく、投稿が容易である種」、「一般市民がアクセスしやすい土地」等、限定的な条件で集積されたデータが多く見受けられた。

例えば、指標種のうちカヤネズミ、トウキョウダルマガエル、マルタニシ、ヒメタニシの 4 種の投稿が確認されなかった。カヤネズミ以外の 3 種については主に谷津田を指標環境とする種であり、市民調査員にとっては気軽にアクセスできる環境に生息していない種である。また、カヤネズミについては一部の写真家や調査員を除き生体を確認することが難しく、フィールドサインとしてアプリで表示した球巣についても高茎草地在が主な環境であることから、市民調査員が確認しにくいことが伺える。

このことから、市民調査においては、調査しやすい種や場所の偏りが生じることを念頭に、調査設計を行うよう努めること。